

# 米国における「東亜同文書院大学」と 愛知大学の『中日大辞典現象』

李春利

愛知大学経済学部教授・ICCS運営委員

## 1. 一、経緯

1901年に上海で設立された東亜同文書院大学を源流にもつ愛知大学の中国研究は「第二の世紀」に入った。「第二の世紀」の幕開けの象徴は2002年の文部科学省21世紀COE (center of excellence) プログラムの採択による愛知大学国際中国学研究センター (ICCS) の発足である。2001年の東亜同文書院百年祭が20世紀を締めくくったとするならば、2002年のICCS発足は21世紀への発進にほかならない。

私はたまたまICCS推進委員会のアメリカ部会に入っているので、米国の中国研究の拠点校と研究交流のネットワークを構築するために、2003年にICCS事務局長 (当時) の山本一巳教授と共に2回にわたって、米国の主要大学を訪問した。

1回目は2003年3月13日から3月22日までで、アメリカ西海岸のカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA)、カリフォルニア大学バークレイ校、スタンフォード大学、ワシントン大学とハワイ大学を訪問した。2回目は9月7日から9月18日までで、中西部のミシガン大学とシカゴ大学、東海岸のプリンストン大学とハーバード大学を訪問した。

訪問先は主に各大学の中国研究センターもしくは東アジア研究センターや関連部、およびアジア図書館などであった。これらの研究機関には愛知大学が編纂した『中日大辞典』や学術誌『中国21』の中国語版などを贈呈してきた。

(中略)

## 四、米国における愛知大学の『中日大辞典』

約250年の歴史をもつプリンストン大学の美しいキャンパス・センタービルの3に、かつてアルベルト・アインシュタイン博士が教えていた教室 (302号) がある。この「アインシュタイン教室」と同じ階の反対側に、プリンストン大学東アジア図書館がある。その中の一角で、私は愛知大学が編纂した『中日大辞典』を発見した。収蔵されているのは1968年に出版された『中日大辞典』の初版である。辞書は相当使いこなされており、本体はかなり傷んでいる。「ご苦労さま」と言ってあげたいぐらいだった。そのすぐ近くに中国「五四運動」の旗手、太平洋戦争時の駐米大使も務めた胡適 (HU Suh) 元北京大学長の「開卷有益」という肉筆の字が掛かっている。ちなみに、胡適も魯迅もかつて東亜同文書院で講義したことがあり、また東亜同文書院の開校式には中国最初の大学の一つである南洋公学 (現在上海交通大学) の創立者、著名な洋務運動家である盛宣懐も出席したとの記録も残っている。

東アジア図書館副館長のMartin Heijdra博士によれば、愛知大学といえば、すぐ『中日大辞典』が思い浮かぶという (この評価は中国でもまったく同じである)。彼はオランダ人で、同国の中国研究の名門校・ライデン大学の出身で、プリンストン大学で博士号を取得した。彼の専門は中国研究であるが、『中日大辞典』を使って日本語を覚えた。その後、東京大学に2年間留学した後に、この図書館に勤めるようになった。ライデン大学では、東アジア研究の専門であれば、中国研究の専攻でも日本語が必修であるという。

また、館長のTai-loi Ma博士はもともとシカゴ大学で長く勉強し、仕事をしてきた。彼が学生の頃、米国での東アジア研究は中国語と日本語両方の習得が要求されていた。

日本ベースの中国研究の成果を読むために、日本語が必修である。そのために、『中日大辞典』は広く使われていたという。

プリンストンのほかに、今回訪問したミシガン大学、ハーバード大学でも『中日大辞典』が発見された。米国最古の中国研究機関・ハーバード燕京研究所 (Harvard-Yenching Institute=哈佛燕京学社) の図書館には『中日大辞典』第二版が収蔵されていた。ハーバード大学フェアバンク研究センター長のWilt Idema 教授も『中日大辞典』を愛用していた。Idema教授はハーバード大学東アジア学部で中国文学を教えているが、昔、北海道大学と京都大学で1年間ずつ訪問研究をしていた。彼もオランダ人で、ライデン大学で博士号取得後、ハーバード大学に移籍するまで母校で長く教鞭を取っていた。彼は流暢な日本語と中国語を使い分けていた。

副所長のRonald Suleski博士によれば、われわれが訪問する前に、Idema教授は愛知大学の『中日大辞典』について詳しく語っていたという。Suleski (中国通称名: 薛龍) 博士はHarvard-Yenching Instituteにも勤めたことがある。彼はイギリス人で、ミシガン大学で中国歴史研究で博士号を取得した後、テキサス大学と上智大学で教えていた。さらに、彼は米国ヒューロン大学 (Huron University) 東京校学長、日本アジア協会 (The Asiatic Society of Japan, 1872年設立) 会長などを歴任し、通算17年間に及ぶ長い日本滞在歴をもっており、ハーバード大学では有数の日本通である。彼は戦前の旧満洲について研究しており、前述のDouglas Reynolds氏 (中国通称名任達) の東亜同文書院に関する研究書を紹介してくれた。2008年、Suleski 博士は愛知大学の招聘を受けて来日し、講演したことがある。当時の講演録は、ロナルド・スレスキー著『満洲の青少年像』(愛知大学東亜同文書院ブックレット4、あるむ、2008年) と題した日本語の著書に収録された。

『中日大辞典』が刊行された時の世間の評価は高く、『朝日ジャーナル』や毎日新聞は「この辞典の出版によって、日本は中国語に関しては世界の学界に誇り得る金字塔を建てた」と絶賛していた。出版翌年の1969年には「中日文化賞」も授与された。欧米の主要大学では東アジア研究専攻の学生に向けて、カリキュラムの中に中国語と日本語両方が必修科目として組み込まれており、時代に先駆けて発行された『中日大辞典』はかつてこのような教育の仕組みとカリキュラムの構造の中で広く使われていたのである。(後略)

---

[注] 愛知大学国際中国学研究センター (ICCS) 設立10周年記念誌 (2013.3) 所載

## 口財團より招請状

### 明年渡米の小岩井教授

さきにロックフェラー財団より日本における優秀なる国際問題研究所として認められ「中国に関する欧米出版図書購入費」として一千<sup>ドル</sup>前後の補助金を交付されその後の活動を注目されている本学国際問題研究所にも又も口財団より「小岩井教授渡米決定」の朗報が入り関係者を喜ばせている。

これはかねて口財団が本学国際研究所を日本における優秀研究所と認定して際、たまたま本学研究所を訪れた口財団人文科学担当C・B・ファース氏と研究所との間に交わされた口財団への要望のうち、先に決定した「中国関係欧米出版図書購入費補助金」と共に「本学優秀研究所員の渡米」問題が口財団の取り上げる所となり、その間学長への人選依頼、個人的折衝と次第に具体化し、ファース氏の尽力もあつて今度正式に決定したものである。

なお、小岩井教授の渡米は来年一月一日より十二月三十一日までの何れか都合のよい六ヶ月を選んで実現される予定で、本学研究所のみならず学問的連絡の拡大という意味で、本学の発展に寄与する所大である。

親愛なる本間学長殿

私は本財団が貴大学に小岩井浄教授が米国に約六ヶ月滞在し中国研究の調査を可能ならしむるために四千二百<sup>ドル</sup>前後の必要とされる補助金を与える事に同意した旨御通知申し上げることのできるのを幸福に存じます。(中略)

補助金の総額は横浜・サンフランシスコ間往復船便の費用、米国内における汽車旅行の費用(シヤトル・シカゴ・アイセーカ・ボストン・ニューヘヴン・ニューヨーク・ワシントン・カンサスシティ・サンフランシスコの経路による)及び一日十五<sup>ドル</sup>として百八十日分を基礎として計上されています。この補助金に関する簡単な公表は本財団次期季報にて行われます。

私は小岩井教授の渡米が同教授にとつても貴大学にとつても有益である事を希望します。勧告或いは諸大学への紹介状等私がそれ以上にできる事がありますならば、遠慮なくお知らせ下さい。敬具

一九五二年十一月六日

チャールス・B・ファース

〔注〕 幻の英語版

愛知大学新聞第三六・三七合併号(昭和二十七年二月二五日)所載。